

## *Oliver Twist* における暗黒世界の实景

西條隆雄

### 盗賊の徘徊と治安

*Oliver Twist* は、若きジャーナリストの目と、新進作家の創作態度をかいま見せてくれる、興味深い作品である。まず、救貧院を後にした Oliver を追ってみよう。彼が真っ先に考えたのはロンドンである。

London! that great large place!—nobody—not even Mr. Bumble could ever find him there!<sup>1</sup>

発想の幼稚さは、救貧院で生死の境をさまよいつづけた Oliver にいかにふさわしいといえるであろう。距離は 70 マイル、Burnet を経て北方よりロンドンに入るのは、Dick Whittington の道でもある。そして「食べるに困らず、思いもよらぬ暮らし」ができると思うのは、おそらく国民になじみの深いこの伝説に依拠したものといえよう。

しかし甘い期待はここまでである。現実には Oliver を迎えるのは、猜疑と狡知にたけた盗賊の世界であった。一週間余、飲まず食わずで歩きつづけた Oliver は、the Artful Dodger (=Mr. Jack Dawkins) の優しい言葉につりこまれ、疑念を抱かずに彼の提案を受け入れる。どこかをぶらついた後、実際にロンドンに入るのは、夜もふけた 11 時頃となった。

As John Dawkins objected to their entering London before nightfall, it was nearly eleven o'clock when they reached the turnpike at Islington. They crossed from the Angel into St. John's Road; struck down the small street which terminates at Sadler's Wells Theatre; through Exmouth Street and Coppice Row; down the little court by the side of the workhouse; across the classic ground which once bore the name of Hockley-in-the-Hole; thence into Little Saffron Hill and so into Saffron Hill the Great: along which the Dodger scudded at a rapid pace, directing Oliver to follow close at his heels. (55)

いったい何故、the Dodger はこんな時間にこんな道をたどりつつ Oliver を Field Lane の隠れ家へ案内したのであろうか。なるほど一番早く、かつ一番安全に通り返れることのできる経路を熟知していることのあらわれではあろう。Islington の通行料取立門はロンドンでもっとも交通量の多いところの一つで、夜の 11 時というのは人目を避けるためもあ

ったろう。しかしそれ以上に the Dodger が注意を払っているのは、夜警の目ではなかったであろうか。一つには近道でもあるが、11 時前には閉鎖する<sup>2</sup> Sadler's Wells Theatre の裏手をまわっていること、そしてかつては格闘技、牛攻め、闘鶏などで名を馳せた、盗賊のたむろする Hockley-in-the-Hole に折れ、次いで Saffron Hill the Great へくると、ここは一目散に駆け抜けているのである。

なぜ一目散に駆け抜けなければならなかったか。これを理解するには、1829 年のピール法案による首都警察組織の強化を考慮しておかねばならない。ロンドンのシティーは古くから単一行政区を保ち、ゆえに昼夜のパトロールが比較的早くから行き渡っていた。これに比べるとシティー以外は各々の教区管轄であったので、Bow Street を擁する Westminster 地区を除けば治安は疑いもなく不行き届きであった。そこでシティー壁を取り巻くような形で盗賊の巣窟が形成され、<sup>3</sup> 富とビジネスの中心地で仕事をしてはシティー警察の権限のおよばぬ彼等の巣窟へと逃げ帰っていたのである。したがって 1972 年に Queen-square Office (Westminster), Worship-street Office (Finsbury Square), Hatton-garden Office, Shadwell Office, Union-hall Office (Southwark) の 7 つの警察署<sup>4</sup> が設置され犯罪防止をめざしたのであったが、昼間はいいとして夜間は従来の教区ごとの夜回りに頼っており、しかもそのほとんどの夜回りは老齢でまともな仕事に就けるような人ではなく、犯罪を見て目をつぶったり、わが身の安全のため逃げ隠れする人々であった。そこで 1829 年、ピールは安全強化のため、ロンドン (シティーをのぞく) を 17 管区に分け、それぞれをさらに小管区、管轄区域、巡回区に分け、1 日 3 交替のパトロール制をとった。<sup>5</sup> また警察官の募集にあたっては、35 歳以下で身長は 5 フィート 8 インチ以上とし、加えて厳しい身体検査を行い、採用になったのちは巡回区のあらゆる通り、路地、倉庫のすべてに通じていること、しかも各戸の住民一人一人を識別できること、そして 10~15 分ごとに巡回区を一周することを義務づけたのであった。<sup>6</sup> 最初こそ人員獲得は難しかったが、やがて旧来の役立たずの人々にとって変わり、初代総監 Richard Mayne の “Perfect command of temper” 遵守の指令<sup>7</sup> を忠実に守る信頼ある警察組織が急速に整備されていった。ちなみに 1830~1838 年間に、採用された警察官のうちほぼ 5000 人が解雇、6000 人以上が職種に耐えられず退職していったと言われる。<sup>8</sup>

Oliver がロンドンに向かったのは冬であり、したがって夜警の勤務時間は夜の 8 時から朝 7 時までである。<sup>9</sup> Saffron Hill 一帯は悪名高く、西隣の Hatton Garden 通り 52・53 番地には治安維持のため警察署がおかれていた。The Dodger が Field Lane の隠れ家へ帰ってくるにあたり、ところによりぐずついたり、急いだりするのは、新しい首都警察法による急速な治安改善をうかがわせて興味深い。

同じように、第 21 章では隠れ家を Whitechapel に変えた Sikes が Oliver を引き連れて強盗に出かけてゆく。朝 6 時前に隠れ家をでると、Bethnal Green Road に折れ、Worship Street を避け、Smithfield の雑踏に身を隠し、Holborn までやってくる。ここで St. Andrews 教会の時計が 7 時を指しているのを見ると、Sikes は大股で 2 マイル余りの道を

早足に駆け抜け、ハイドパークの角を過ぎ、ケンジントンに入ってやっと速度をゆるめるのである。夜勤と昼勤が交替する、比較的警備の薄くなった時間帯を選んで Great Marlborough Street 署の管内を駆け抜けたのである。強盗を働く目的地はテムズ川上流の Chertsea である。ピールの議会における法案説明によれば、Chertsea 一帯、つまり Brentford, Twickenham, Isleworth, Hounslow の治安は “scandalous”<sup>10</sup> であった。ロンドンの治安がよくなるにつれ、強盗を働く対象も都心から相当隔たった周辺部へ移ってゆかねばならなかったのである。

*Oliver Twist* が描いている時期は、“Stop thief!” の場面に登場する “police officer” とか、次章の “policeman” という語が示すように、ピールの首都警察法が通過した後の数年間ということになる。Sikes がよくやる「左耳の後ろで吊り紐を締め、右肩に首をうなだれさせる」(87) 仕草が Fagin および手下どもを怯えさせる時代であった。しかし、刑法改正の方面も急速に進展し、1833 年より死刑は殺人以外には適用されなくなったので、厳密に言えば 20 ポンド紙幣を盗んだ科 (47 章, Noah Claypole) では絞首刑をもって脅かすことはできなかったはずである。しかし、実世界においては絞首台の暗い影はいぜん尾を引きつづけていて、<sup>11</sup> Sikes の脅しは十分に効果をあげたと思われるのである。

#### Fagin とその一味

Oliver が紹介された老紳士 (“a 'spectable old genelman” [54]) は “a very old shrivelled Jew” (56) で、顔は “villainous-looking” で “repulsive”, 髪は “matted red hair”, そして “the wily old Jew” (134) とか “like some loathsome reptile” (135) と表現されている。そんな気味悪い人物でありながら、彼がそう指示しているのであろうか、彼は “the merry old gentleman” と呼ばれている。そして彼をとりまく手下は、the Artful Dodger, Charles Bates をはじめ、子どもばかりである。盗賊仲間が主として子どもたちというのは時代に照らして正鵠であろうか。あるいは単なる創作上の都合であろうか。

この疑問に対して文芸批評家の多くは小説上の技巧だとして事実の詮索に踏み込まうとはしない。しかし若きジャーナリスト作家が描いたロンドンの暗黒世界はどうやら事実であるらしい。Donald A. Low<sup>12</sup>によれば、19 世紀初頭の一大特徴は泥棒の若年化現象であるという。子どもたちは 8~9 歳までに一人前の犯罪者になっており、10 才代になるとすでに Newgate 獄にたびたび顔をだし、オーストラリア送りとなるか絞首台行きの人生を受け入れている。しかも彼らは極刑を恐れるどころか、むしろそれを誇りとし、死の間際までその誇りを崩そうとはしない。とりわけ Bermondsey, Brixton, Tooting, Vauxhall の地域では捨て子やその類の子どもがたくさんいて、その子どもたちは生きてゆくためにいとも易々と犯罪者の手中に転がりこんでいったという。そして、そのころ絞首台で吊された犯罪者 20 人のうち、18 人は 21 歳未満であったと言われる。<sup>13</sup> いかにか若年層が犯罪に関わっているかを物語る一例ではないであろうか。

The Dodger が Oliver に語りかける際に、彼は “the mill...inside a Stone Jug” (53) を説明して、 “always agoing up, and nivir acoming down again” と言っている。 Oliver にはもちろん何のことが見当もつかないが、これは 1817 年に Brixton 獄に初めて設置された treadmill のことで、 Holloway 獄のように水を汲み上げる実益に用いる小型のものは例外で、たいていは苦痛を与えるための発明物であった。 Coldbath Fields 懲治監獄はこれを 6 台設置し、1 台につき 1 日 24 人がこれを稼働する。前頁の図に見るように、めいめい板壁で仕切られた中で 12 人が 1 分間に 2 回転する踏車 (周囲は 16 フィート、8 インチ幅の踏段 24 個がついている) を 15 分間踏むとベルが鳴り、それを合図に今度は休息している別の 12 人が交替する。これを同じやり方で毎印 5 回繰り返すのである。運動量は 10,800 歩となり、これは獄内の規定食の下では健康を損ねるほどの重労働であったらしく、囚人の中には苦しさまぎれて仮病を使ったり、実際に足に傷をつけてこの労働を逃れる者もいたようである。<sup>14</sup> 場所によっては Cambridge で 10,176 歩、Brixton, Guildford, Reading で 13,000 歩 (夏期相場)、Warwick で 17,000 歩 (夏期相場) であった<sup>15</sup> というから、treadmill の過酷さは相当に忌み嫌われたであろう。なお、踏み車の回転をきつくできるように、風圧を利用した調節弁が隣接して構築されており、囚人がいくら早く回転させようとしても所詮、徒労に終わるべく工夫されている。したがって踏み車は一種の拷問器具に他ならない。Chitling は 42 日間囚人服を着せられたと述べているし (18 章)、あの儲け仕事でなら 6 週間くらいぶち込まれたって平気だという (25 章)。もちろん the Dodger も一度ならず踏み車の稼働を体験しているであろう。

Fagin 配下の子どもたちは、厳しい監視としつけの下にあって、規律を守り、絞首刑を恐れつつもこれを受け入れ、いざその試練にあっても首領を裏切ることなく黙ってこの世から姿を消す。Fagin の次のつぶやきに背筋の凍る迫真性を覚えるのは、これが単なる虚構ではないからである。

“Clever dogs! Clever dogs! Staunch to the last! Never told to the old parson where they were. Never peached upon old Fagin! And why should they? It wouldn't have loosened the knot, or kept the drop up, a minute longer. No, no, no! Fine fellows! Fine fellows!” (59)

彼は “self-preservation is the first law of nature.” (66) を徹底して守り、己れの保身こそは第一関心事であって、手下の命などは自分の掌中で好き勝手に弄ぶ人物である。

ついでながら Fagin が述べる言葉、および彼とその一味をとりまく環境にしばらく注意を向けてみたい。上記の “knot” および “drop” は Newgate 獄の「債務者の門」の前で組み立てられる絞首台の付属品である。Tyburn における処刑は 1783 年に終止符を打ち、以後は公開処刑が廃止される 1868 年まで、Newgate 獄の前で行われたのであった。その第一回目は 1783 年 12 月 9 日で、10 人が吊された。その日、絞首台の中央には落とし戸

ふうの台座(縦横 10×8 フィート)が置かれ,これが床より 6 インチ高く上っている。台座は二本の梁で支えられ,その梁はボルトで止められていて,レバーを動かせばボルトが抜け,台座は瞬時にして落下する仕掛けになっている。<sup>16</sup> Fagin はのちに独房に投げ込まれたとき,このように思いを廻らしている。

With what a rattling noise the drop went down; and how suddenly they changed, from strong and vigorous men to dangling heaps of clothes! (407)

また,絞首台は平行な二本の横木にいくつかの吊り紐を取り付けていて,数名を一度に吊せるようになっていた。<sup>17</sup> Newgate 獄前の処刑は月曜日の朝 8 時に執行されるので,絞首台は前夜の 10 時に Newgate 獄の倉庫から引き出され,当日の朝 7 時までの間に 20 人の職人によって組み立てられた。報酬は一人あたり 6 シリング 8 ペンスに加えてビール 1 パイントだけなので,職人には不満が大きかったらしい。<sup>18</sup>

ところで,処刑は当時見せ物であって,これを見るために実に多くの人々が集まった。月曜日の朝 3 時ごろにはすでに 4~5,000 人の群衆が獄前に詰めかけ,これに呼売商人が手押し車を押しながら加わる。さらには盗賊やならず者も加わって,6~7 時には立錐の余地もなくなる。絞首台の警護のために警官が出動し,7 時には首吊り役人 William Calcraft (1800-1879;シティーの死刑執行人 1829-1874) が処刑台に姿を見せる。すぐ隣の St. Sepulchre の鐘が 8 時を打つと,Newgate の弔鐘がなり,死刑が執行される。<sup>19</sup> ロンドンにおける死刑の数は,刑法改正によって減少の一途をたどり,1820 年は 43 回,1825 年は 17 回,そして 1830 年には 6 回となっている。<sup>20</sup> 希少価値の娯楽とあって,人々は大挙しておしかけ,罪人しだいでは Ludgate Hill から Smithfield にかけて 3 万人から 10 万人がひしめいた。もちろんよく見える席は一席あたり 10 シリングから 1 ギニーとなり,向かいの Lamb's Coffee House の屋根裏部屋は 5 ポンド,通りに面した個人の家では 2 ポンドが相場であった (1840)。<sup>21</sup>

さてこの “merry old gentleman” は Oliver が投宿した翌朝,子どもたちを集めて “game” (61) を行い,the Dodger と Bates が Fagin からいとも巧みにメガネ,財布,懐中時計をすり取る演技を行ったのち,Oliver も試みるように誘われた。何も知らぬ Oliver は,ハンカチを抜き取られて慌てふためく Fagin の姿を見てうち興じているが,この “teaching” もまた,その虚構化の巧みさゆえに,正しく把握されていない。Charles Knight は *Stow's Survey* (1598), および *Annual Register* (1765) を典拠に “school for thieves” が古くから存在することを述べているが,<sup>22</sup> Regency にもこのような養成所は衰えをみせず,師の後ろを何人かのスリ仲間が追ってハンカチを抜き取ったり,鈴つきの上着から鈴を鳴らすことなくハンカチを抜き取る訓練をしていた例を挙げている。<sup>23</sup> やがてうまくなると彼らは朝の 10 時から昼の 2 時まで市長公邸やチープサイドをうろつきながら仕事をするのであった。<sup>24</sup> そして,盗品といえばこれは Field Lane にもってゆけば買い取って

くれたのである。当時 Field Lane と言えば、即故買と言われるほど当局にその名は知れ渡っていた。*Oliver Twist* の 26 章には “traders” (184) が軒を連ねている。Mrs. Diner, of Field Lane はとりわけ故買で有名であった。<sup>25</sup>

その故買は “fence” と呼ばれる。Sikes が Fagin の隠れ家を訪れたとき、彼は “Ill-treating the boys, you covetous, avaricious, in-sa-ti-a-ble old fence?” (86) と怒鳴っているが、この “fence (=receiver of stolen goods)” なる語を目にすれば、読者は、当時保釈と再逮捕を繰り返していた悪名高い Isaac Solomons (c.1785-1850) をすぐさま思い浮かべたであろう。彼は fence として捕らえられ、Newgate に投獄され (1827)、保釈中に逃走して Van Diemen's Land に渡る (1828) が、ここで捕らえられて本国に送還されて流刑の判決を受け、再度 Van Diemen's Land に送られる (1831) も数カ月後には帰国する。彼の名は 1830 年の 7 月、盗みと盗品買い取りに関する 13 にのぼる告訴を受けて Old Bailey で裁かれて最高に達する。彼についての様々なパンフレット類が書かれ、彼をヒーローに仕立てた、あることないことを書いた物語が流布するのである。銀行家とぐるになっているとか、警官を雇っているとか、あるいは彼の逃亡、妻の行状が書きたてられる。ディケンズがこの人物を Fagin のモデルにしたかどうかをめぐっては、J. J. Tobias の詳細な研究<sup>26</sup>がある。二人の顔つきが違うこと、Solomons に Fagin ほど汚く守銭奴的な習性がないこと、ユダヤ人の風体が見られないことなどを考えると、二人は重なり合わない。しかし、モデルにはなっていないにしても、Solomons という事実が当時の社会に存在したこと自体は記憶にとどめていいであろう。*JFK* に似て、事実をバックにした虚構には恐ろしいほどの迫真力が加わる。

### 作品の構成と評価

*Oliver Twist* に描かれた盗賊の生業は、1830 年前後の実景をうまく描出しており、作品は私たちにとって 19 世紀初頭の犯罪世界の信頼ある案内役をはたしてくれる。当時の読者の中には、単に “beggars' opera” だとして一蹴するものもあればすばらしい追真性をほめるものもいて、評価は二分していた<sup>27</sup>が、おそらく今日においてもそれは同じであろう。初期ディケンズの作品構成は稚拙ではあるが、他方、個々の場面における人間洞察、制度諷刺、場面構成には非常にすぐれたものがある。

この評価の二分は、作品自体の構成方法に端を発していよう。17 章の冒頭で作家は “streaky bacon” (118) という言葉を用いてその原理を述べている。血生臭いメロドラマでは悲劇場面と喜劇場面が交互にやってくるのがきまりで、この場面転換、あるいは時と場所の急激な変化こそは小説の従来慣行でもあれば、創作上の “great art” でもあるという。つまり、小説批評が稚拙で、すぐれた小説についての展望を見出しえず、プロットの善し悪しを論じているような時代にあって、26 才の新進作家にとっては批評界に創作の拠り所を求めることはできなかったのである。「少なくとも 3 年間、ごく数日をのぞいて、毎

晩芝居小屋に通った」<sup>28</sup> と言うほど芝居に熱を入れ、家に帰ってからも 4~6 時間俳優の仕草をまねていたディケンズにとっては、大衆を魅した当時のメロドラマに創作上の秘訣を求めても不思議ではなかった。そういうわけで、この作品は“streaky bacon”なる原理に従い、場面も変わればまた異質のものが入り交じり、作品全体としてはいささかまとまりに欠けるのである。

この構造上の溝を埋め合わせるために、ディケンズは夢、あるいはそれに類似した工夫を援用した。一場面から別場面への移行が夢から覚める形をとったり、あるいは長く続く幸せな場面の中に Sikes と Fagin の悪夢が忍びこんでくるのである。夢は場面の移行だけに使用されているのではない。それは救貧院と盗賊の世界と Brownlow の世界を結び、作品のプロットをも動かしてゆくのである。

たとえば、その一例は Brownlow が Oliver の顔を見て心の中に “a vast amphitheatre of faces” (70) を思い浮べつつ、思い出の糸を必死に手繰っている時であった。Oliver は Brownlow 邸で熱病と戦いつつ、昏々と眠りつづけている。その深い眠りは “that deep tranquil sleep...that calm and peaceful rest which it is pain to wake from”(78) と表現されている。これは *Hamlet* の第 3 独白 (三幕一場) を想起させる言葉とイメージである。その彼が長い眠りから覚め、Bedwin 婦人の部屋に案内されるなり、部屋に掛けてあったある女性の肖像画をくい入るように見つめている。彼が “...what a beautiful, mild face that lady's is!” と言いながら恐れおののく姿を見て、Bedwin 婦人は「こわがっているのではないでしょうね」と尋ねた。すると Oliver はこう答えるのである。

“Oh no, no, but the eyes look so sorrowful; and where I sit, they seem fixed upon me. It makes my heart beat, as if it was alive, and wanted to speak to me, but couldn't.”  
(80)

作家は *Hamlet* の亡霊出現の場面 (一幕二場) を念頭においているのであろう。加えて、この時の Bedwin 婦人の語り方を “suiting the action to the word” (80) とまで表現している。このような言葉の使用をみて読者は亡霊と Hamlet が父子関係にあるのを思い出しつつ、この肖像画のモデルが主人公の母親であろうとすぐさま察知するであろう。しかし、この場面におわされている以外に、母と子の関係は作品中において最後まで伏せられており、わずかに Monks が Mr. Bumble と会談する際に出てくるだけで (38 章)、物語の終章近くになってようやく主人公、Brownlow, Rose Maylie, Oliver の母 (Agnes Fleming)、および Monks の実に複雑な人間関係が一挙に説明されるのである。目覚めの場面は、接着剤の働きをこそすれ、いまだ作品全体の構成を司る工夫とはなりえていない。

環境に翻弄される無性格な主人公となっているので、作品の興味は彼が幸せをつかむテーマにあるのではなく、むしろ主人公を恐怖に陥れ、彼の生命を根底から脅かす悪夢世界を描き出すところにある。そして、その悪夢—世界—救貧院の非人間性と盗賊世界—の残

忍さはその中を闊歩する人間に凝縮され、その人物の具体的言動こそがその世界をじかに見せてくれるのが、初期ディケンズの一大特徴である。救貧院の考察は別の機会にゆずるとして、ここでは盗賊世界がどのように虚構化され、それが作品にどのような価値を付与しているかを追ってみたい。

Sikes は 35 歳くらいで体のがっしりした、「頭にくれば他人の血を流すことなど平気」(145) な人間である。酒・強盗・殺人以外にはさして興味を示さず、“in for a penny, in for a pound” (141) に徹し、何かにつけてすぐに頭に血がのぼる輩である。一方、彼と手を組む Fagin は老櫓で、Sikes を利用するだけ利用したあとは簡単に捨て去るつもりでいる。自らを守るためには、手下であろうと相手に不利な証言（これが真実でなかったとしても）を敢えて行う彼には (127)、相棒を裏切ることなどいともたやすかろう。暴言をはき暴力を振るう Sikes に対し、表面では彼をなだめすかしつつも、心の中では激しい憎悪を抱いている。たとえば、Sikes がいつものように怒鳴りちらしたあと酒を求め、冗談のつもりで「毒を混ぜないでくれよ」と言ったとき、血の気の引いた唇をかむ Fagin を作家はこんな風に描写している。

[The readers] might have thought...the wish to improve upon the distiller's ingenuity not very far from the old gentleman's merry heart. (87)

彼の心の中に渦巻く考えが手にとるように表れているのではないか。また、別の折には、パブで Sikes に金を渡したあと、彼が酒を要求したときに、バーテンが Fagin に向かってどういたしますかと言わぬばかりの顔をすると、Fagin が首を振るところがある。毒を盛る必要はないと伝えているのであろう (15 章)。が、相棒の命など首の動き一つで左右できるほど、彼は常時身の周辺をしっかりと固めているのである。

Fagin の Sikes に対する憎悪は作品の展開とともに除々に形をとりはじめる。酒でぶっ倒れた Sikes を蹴とばし(19 章)、情婦である Nancy が彼にアヘンを飲ませて意識を失わせた (39 章) あとは、Nancy にてつきり情夫ができたと思ひ込み、Nancy および彼女の新しい情夫と手を組み、悪事を知りすぎた Sikes を片づけてしまおうと考えるにいたる。“With a little persuasion...what more likely than that she would consent to poison him?” (342) とつぶやきながら、まるで仇敵をひねり殺すかのように自分の両の指をねじる彼は、Sikes を亡き者にしようと忍耐強くかつ執拗にその機会をねらう。そんな Fagin を描くページの見出しは“Fagin as a Staunch Friend” (341) となっている。Fagin の本音を伝えて妙ではないか。

The Dodger が捕まった知らせを受けて手下が悲しんでいると、Fagin は彼の職業にたいする誇りと天才的な手腕をみごとに描きあげて、手下の子どもたちに大きな安堵と誇りを植えつけるなど (43 章)、手下を束ねてゆく才覚には興味深いものがあるが、盗賊世界をすぐれた次元の読み物にしているのは、この二人の人物の内面を克明に分析した点にあ



ろう。ほとんど悪魔的としかいいようのない人物が、いつしか一介の人間になり下がり、自分の犯した罪に怯え、死の恐怖におののくのである。

それは Nancy 殺害後におこった。それまでは野獣同然の、情けのかけら一つ持たなかった Sikes が、おのれが手を下した殺人に怯えるのである。頭髪のついた梶棒を焼ききり、血に染まった部分を切り取って火にくべる。だが、そうする間にも死体に背を向けることはない。白いハンカチを高くかかげ、助命を乞う彼女をなぐり殺した凶悪犯に、罪の呵責がおそろしい力でふりかかる。哀願する彼女の目 (363) がとがめるように自分に向けられるのを想像して、動ぜぬはずの彼が自制を失い、隠れ家をあとに放浪の人となる。何マイルもの道を北へたどってはまたロンドンに引き返し、そして再び北に向かう。落ちつきを失い、行くあてもなく、ただ殺人の噂を耳にしては心が動転し、人気のない暗闇にくと、今度はえもいえぬ恐怖にとらわれる。“that morning's ghastly figure” (367) が、彼をひたひたと追ってくる。この“phantom” (368) につけられ、ついで暗闇のなかに“those widely staring eyes” (368) が浮かびあがると、彼は全身をわなわなと震わせて戸外へ飛び出す。一度は恐怖の炎を消すべく火事現場で獅子奮迅の働きをするが、火事がおさまるや恐怖は以前の十倍の強さとなってまい戻る。愛犬 (凶暴さの本能を示していよう) にも逃げられて Rotherhithe に一人帰った殺人犯は、血色は失せ、頬はこけ、肉は落ち、息使いの激しい“the very ghost of Sikes” (385) となっていた。この憔悴した彼をさらに警察が追う。通りという通り、窓という窓からは群衆が逃がすものと睨み、怒号を発する。追いつめられた Sikes は屋根にのぼり、一か八かどぶ川に飛び込んで逃れようと決意する。だが、追跡は虚空からも迫っていた。Sikes が綱を胴体に巻きつけようとしたとたんに、彼は“The eyes again!” (391) と、この世のものとも思えぬ叫びをあげ、次の瞬間にはすでに落下し、命綱が誤って巻きつき、宙ぶらりんのまま即死していたのである。罪のとがめを劇化し、犯人を憔悴させ死に追いやる数章は、センセーショナルな殺人小説の域を抜け出て、すぐれた文学となっている。

一方、Fagin の捕縛 (50 章)、および裁きと処刑 (52 章) は、第三者の語りを通して、あるいは抑制のきいた叙景文で描き出され、悪事の露見した彼には言葉においても行動においても自由はない。彼は凶暴な群衆の石つぶてをくらい、顎ひげは引きちぎられ、警官が割って入らなければ怒りに狂う群衆に八つ裂きにされていたかもしれなかったし、また彼が連行される時ですら、彼らは歯をむき出して飛びかかろうとするほどであったと、配下の Kags はそのすさまじさを語る。

Fagin が“accessory” (383) として裁きを受ける法廷は、床から天井まで顔また顔で埋まり、“inquisitive and eager eyes” が彼を凝視する。彼は弁護を求めて無言の訴えをするが、同情の目は皆無で、ただに有罪をのみ待ち望む目であった。やがて有罪の判決が場内をどよめかせ、そのどよめきは“angry thunder”のごとくに高まって行く。彼は独房入りとなり、月曜日に処刑が決まった。これまで闇を渡り歩いた Fagin が、夜の到来とともにいたたまれなくなり“Light, light!” (407) と叫びながら激しくドアを叩くのである。い

まや時を告げる鐘は“knell”となり、“Day”はめぐり来れども彼にとって“Day”はもはやない。来たと思えばたちまち消えてしまう。時は物理的な時間であることを止め、処刑の朝に向かって迅速に飛び行く観念的な時間となって、恐怖と焦燥だけを後に残して行く。日曜日になると Fagin は罪の意識にさいなまれ、恐怖のあまり発作を伴って凶暴となる。残る時間は容赦なくすぎる。8時、9時、10時。追いつめられた囚人は一刻ごとに焦燥と恐怖と絶望に駆られ、形相もいまや人間の形相ではなく“snared beast” (409) のそれとなる。精神は錯乱を来たす。本性を隠し“merry old gentleman”を演ずる余裕を失った今、時々刻々人間の姿からなにか下等な動物に成り下がり、絶望の叫びを部屋中に、いや獄中にとどろかせて、崩れ落ちてゆくのである。Fagin の最期は、Sikes の場合に劣らず内景描写にすぐれ、作品の白眉となっている。

盗賊世界がさしたる抵抗もなく読者に受け入れられた理由を今一度たづねてみれば、それはとりもなおさず作者が盗賊のスラングに節度の枠を設けたことがあげられよう。Oliver は下卑た言葉にさらされて育ったにもかかわらず彼の語る言葉には何一つその影響が見られない。また最初こそ“brat”, “crib” (106) とか“sich”, “heavins” (107) のように低俗さを見せる Nancy も、以後は言葉使いも上品になり、Oliver を救い出す聖なる女性に変貌してゆくのである。Fagin および Sikes の言葉もまた泥棒仲間にしかり理解できない言葉ではなく、狡猾さ、残忍さ、および衝動的行動と発想をさえ描き出せば、それ以外の言葉は意識的に理解しやすいように置き換えられていることがわかるであろう。盗賊世界のスラングはできる限り抑制され、あまねく読者が理解し受け入れることができるように配慮されているのである。ニューゲイト物に墮さぬ理由の一端は、案外このあたりにあるのではないであろうか。

#### 注

- 1 Charles Dickens, *Oliver twist*, The Oxford Illustrated Dickens (1949; rpt. London: Oxford University Press, 1964), p.52. 以下、テキストの引用はページ数を ( ) 内に示す。
- 2 Dennis Arundell, *The Story of Sadler's Wells, 1688-964* (London: Hamish Hamilton, 1965), p.110.
- 3 Donald A. Low, *Thieves' Kitchen: the Regency Underworld* (London: J. M. Dent & Sons, 1982), pp.19-20
- 4 John Wade, *A Treatise*
- 5 *on the Police and Crimes of the Metropolis* (1829;rpt. Montclair, NJ: Patterson Smith, 1972), pp.37-8,
- 6 W. L. Melville, *A History of Police in England* (1901; rpt. Montclair, NJ: Patterson Smith, 1971), p.238.
- 6 James Grant, *Sketches in London* (London: W. S. Orr & Co., 1838), p.389.

- 7 Lee, *Op.Cit.*, p.242,
- 8 *Ibid.*, p.240.
- 9 Donald Rumbelow, *I Spy Blue: The Police and Crime in the City of London from Elizabeth I to Victoria* (Bath: Cedric Chivers,1971), p.111.
- 10 *English Historical Documents*, XI, p.375.
- 11 *Ibid.*, XII, p.497.
- 12 *Thieves' Kitchen*, p.63.
- 13 Rumbelow, *Op.Cit.*, p.101.
- 14 Henry Mayhew and John Binny, *The Criminal Prisons of London and Scenes of Prison Life* (London: Charles Griffin and Co., 1862), pp.303-7,
- 15 William Hone, *The Table Book* (London: Hunt and Clarke, 1827), p.755.
- 16 David D. Cooper, *The Lessons of the Scaffold* (Athens: Ohio University Press, 1974), pp.6-7.
- 17 Arthur Griffiths, *The Chronicles of Newgate* (1883; rpt. NY: Dorset Press, 1987), p.422.
- 18 Rumbelow, *Op.Cit.*, p.101.
- 19 Cooper, p. 19.
- 20 W. Eden Hooper, *The History of Newgate and The Old Bailey* (London: Underwood Press Ltd., 1935), p.123.
- 21 Griffiths, *Op. Cit.*, p.429.
- 22 Charles Knight ed., *London*, IV (London: Charles Knight, 1843), p.226.
- 23 J. J. Tobias, *Prince of Fences: The Life and Crimes of Ikey Solomons* (London: Valentine, Mitchell, 1974), p.55.
- 24 Rumbelow, *Op.Cit.*, p.166.
- 25 Low, *Op.Cit.*, p.78.
- 26 J. J. Tobias, *Op.Cit.*, p.147.
- 27 *Spectator* (1838): "...though deficient in *narrative*, his *descriptions* is sometimes nicely true, and often powerful."; Lord Melbourne: "It's all among Workhouses, and Coffin Makers, and Pickpockets...I don't like *The Beggar's Opera*."; Richard Ford (for the *Quarterly*): "...many shortcomings of the book, especially its unfair satire of the Poor Law, its ridiculous plot tangles, its 'unendurable' genteel females, its improbable hero, its slang, and its use of Newgate 'low' characters." Collected in Philip Collins ed., *Dickens: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), pp.42-3, 44, 81-6, respectively. George H. Ford, *Dickens and His Readers* (1955; rpt. New York: Gordon Press, 1974), p.42.
- 28 Kathleen Tillotson ed., *The Letters of Charles Dickens*, Vol. IV (Oxford: Oxford

University Press, 1977), p.245.

『甲南大学紀要文学編』92 (1995年3月)